

発表ツールにおける箇条書き分析 —引用に伴う言い換えを中心に—
AN ANALYSIS OF WRITTEN ITEMS FOR PRESENTATION TOOLS

鎌田美千子・仁科喜久子

Michiko Kamada, Utsunomiya University
Kikuko Nishina, Tokyo Institute of Technology

概要：プレゼンテーション時に提示するスライドでは、聞き手を意識した簡潔な表現が求められる。本研究では、原文からの引用に伴う言い換えに焦点を当て、中国語を母語とする学部留学生の箇条書きを、日本人学生のものと比較し、分析・考察した。その結果、学部留学生の箇条書きは、1)「句」や「文」によるものが多数を占めること、2)「句」の使用では、日本人学部学生と同様に「名詞句」の使用が多いこと、3)「省略がある文」及び「記号との組み合わせ」が限られていること、4)原文からの「抜き出し」が多いことが明らかになった。
キーワード：箇条書き、アカデミック・ライティング、引用、言い換え、学部留学生

1. はじめに

近年、プレゼンテーションの機会の広がりとともに、大学等においても、PowerPoint や OHP をはじめ、発表ツールを利用したプレゼンテーション教育が浸透しつつある。こうした中で、長沼他(2003)は、発表ツールを用いたプレゼンテーション時の「良いスライド」として、1) 箇条書き、2)表、3)グラフ、4)ダイアグラム、5)写真・動画の5点を挙げている。本研究では、このうち、日本語教育の観点から、日本語表現に直接関連する「箇条書き」を取り上げる。

発表ツールによる文書作成においては、内容を一目で明確に示す簡潔さが求められ、「要点を簡潔に示しながらまとめる」という点で通常の文章表現とは異なる。実際に、プレゼンテーションに向けて作成された日本語学習者による添削前のスライドを見ると、レポート等のある程度まとまった文章が書ける上級日本語学習者であっても、簡潔にまとめられずに長い文章で綴ってしまうといった問題や、「用言の名詞化」をはじめ、箇条書きといった表現形式に伴って生じる表現上及び文法上の問題等が観察される(鎌田, 2005)。そこで、本研究では、発表ツールを用いた文書作成に関する日本語指導を検討する上での基礎研究として、学部留学生によって産出された箇条書きにどのような特徴や問題点があるのかを明らかにする。具体的には、PowerPoint や OHP 等の発表ツールを前提とした文書作成過程での、「原文からの引用」に焦点を当て、日本人学部学生の場合と比較することにより解明する。

2. 分析方法

以下の手続きで得られた資料のうち箇条書きで書かれたものを抽出し、表1のように中国語を母語とする学部留学生(C群)と日本人学部学生(J群)の2群に分け、分析を行った。中国語母語話者を対象にした理由は、日本国内の学部留学生数の中で高い割合を占め、筆者の一人が所属する大学の必修日本語科目履修者数においては9割に及ぶ点にある。中国語を母語とする学習者に限定することにより、その教育上の示唆が得られる反面、他の言語を母語とする学習者には当てはまらない可能性も含む。他の言語話者に関しては別稿に譲る。

表1 分析資料

群	対象	日本語学習年数
C群	中国語を母語とする学部留学生20名(男7名、女13名)によって産出された箇条書き202項目	平均48.8ヶ月(最長10年、最短15ヶ月)
J群	日本人学部学生20名(男2名、女17名、無回答1名)によって産出された箇条書き264項目	—

<手続き> 課題文 A(229 字)及び課題文 B(270 字)について、それぞれ PowerPoint(または OHP)資料作成にあたっての筆記による下書きを、課題用紙に記載した指示により、以下 1.~3.の要領で求めた。同時に、「PowerPoint 及び OHP は聞き手にわかりやすく聞いてもらうために使用するものである」ことを口頭で伝えた。

1. 課題文 A (『環境白書 (平成 18 年版)』から抜粋したもの。高齢化社会における単身世帯のエネルギー消費について分析した結果が示されている)を読み、その内容を、ゼミ (演習等)での発表の一部に入れるとしたら、どのような PowerPoint (または OHP) 資料を作成するかを考え、枠 (縦 9.5×横 13.5) の中に書き込む。
2. 上記 1.と同様に、課題文 B (日本博物館協会ホームページ「やまびコネット」から抜粋したもの。使い捨てカイロのしくみについて述べられている)を読み、どのような PowerPoint (または OHP) 資料を作成するかを考え、枠 (同上) の中に書き込む。
3. 中国語を母語とする留学生群 (以下、C 群) は、内容理解を問う正誤問題に答える。正答率 7 割以上に達したもので、かつ箇条書きで書かれたものを抽出し、分析資料とする。課題遂行にあたって、時間の制限は特に設けなかったが、所要時間は概ね 15~20 分程度だった。課題終了後、調査協力者に紙面で PowerPoint 及び OHP による発表や授業を聞いた経験の有無を尋ねた結果、全員から「経験がある」と回答があった。調査協力者の日本語レベルは、日本語能力試験 1~2 級レベル相当である。
こうして得られた箇条書き 466 項目を、1)箇条書きに用いられた表現形式、2)原文から箇条書きへの言い換え、の二点から分析した。

3. 結果と考察

3.1 各箇条書きに用いられた表現形式

箇条書きは、通常の文章と比較すると、「語」、「句」、「記号」等といった「文」以外の表現形式や、体言止めや名詞句の使用、省略のある文等が多い。日本語作文・論文等の指導で一般的に取り上げられる「文章を書く」こととは異なる言語運用である。本研究ではこの点に着目し、日本語学習者が箇条書きによる原文からの言い換えをどのような表現形式によって達成しているのか検討した。

箇条書きに用いられた表現形式を計量した結果を図 1-1、1-2 に示す。C 群では、課題文 A 及び B 双方で「文」、「句」、「語」の順であった。J 群では、課題文 A で、「句」、「文」、「省略がある文」の順で、課題文 B で、「句」、「語」、「記号との組み合わせ」の順であった。

この中で、まず、C 群、J 群ともに、高い値を示した「句」による箇条書きに着目する。課題文 A・B 双方において、これら「句」による箇条書きは、両群で名詞句によるものが多数を占める(図 2-1、2-2)。さらに、これらがどのような句構造を成しているか類別すると、C 群、J 群ともに「N(NP)+の+N(NP)」(N は名詞、NP は名詞句を表す)の使用が顕著であった(図 3-1、3-2)。

次に、C 群で最も多かった「文」による箇条書きに着目する。スライドにおける箇条書きの表現形式としては、単文での簡潔な表現が望ましいと考えられる。この点から、「文」による箇条書きの内訳を分析した結果が図 4-1、4-2 である。C 群では、課題文 A では複文が全体の約 7 割に及び、また課題文 B では約 4 割に上る結果から、複文の使用が少なくないことがわかる。J 群では、課題文 A と B で異なる傾向が表れた。課題文の影響等が考えられるが、この点の分析については、紙幅の関係上、稿を改めて行う。

さらに、上述した図 1-1、1-2 の結果より、J 群ではある程度まとまって見られる「省略がある文」及び「記号との組み合わせ」の使用数が C 群では極端に少ないことに注目したい。日本語作文・論文等の指導は一般的に文章表現が中心となるため、これらの表現に不慣れで

あることが推測され、それを裏付ける結果と考えられる。特に課題文 B における「記号との組み合わせ」が J 群で多く表れているのに対し、C 群ではほとんど見られない。図 4-2 の結果より、J 群で「複文による簡条書きが少ない」ということと合わせ考えると、J 群が記号を活用し簡潔にまとめようとしていることが推察される。それに対して、C 群では、「文」、「句」、「語」による簡条書きに偏り、その表現形式の種類が限られていることがわかる。

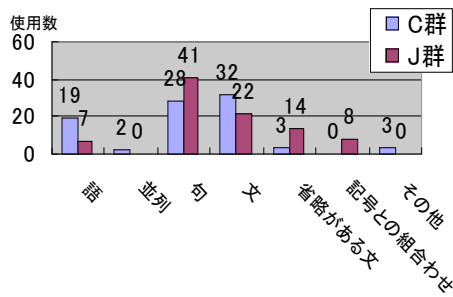


図 1-1 各簡条書きの表現形式 (課題文 A)

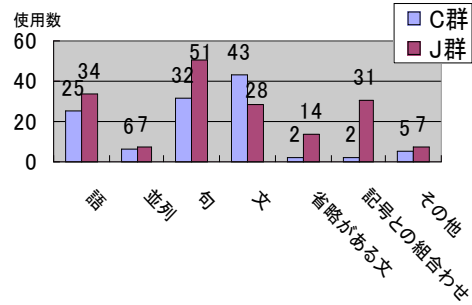


図 1-2 各簡条書きの表現形式 (課題文 B)

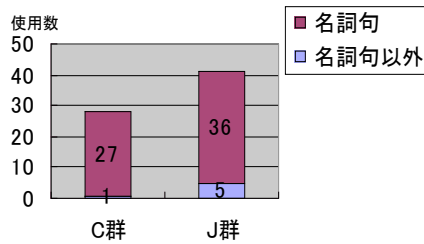


図 2-1 簡条書きに用いられた句 (課題文 A)

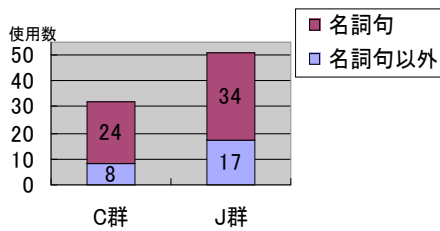


図 2-2 簡条書きに用いられた句 (課題文 B)

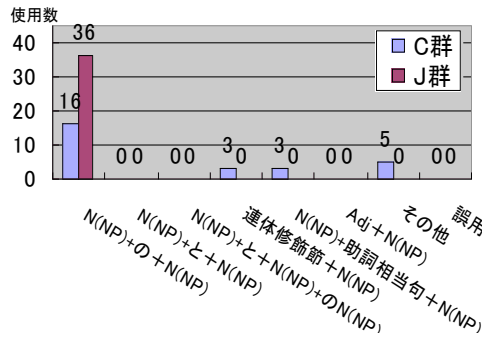


図 3-1 簡条書きに用いられた名詞句 (課題文 A)

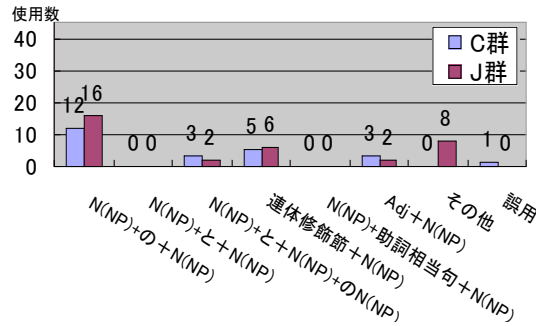


図 3-2 簡条書きに用いられた名詞句 (課題文 B)

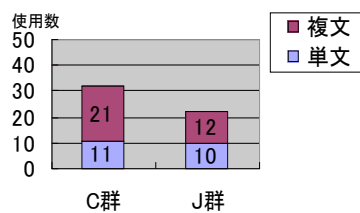


図 4-1 文による簡条書きの内訳 (課題文 A)

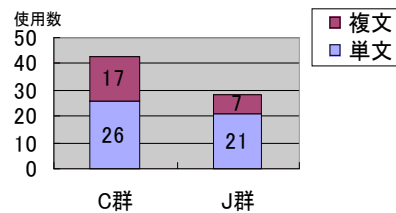


図 4-2 文による簡条書きの内訳 (課題文 B)

3.2. 原文から簡条書きへの言い換え

原文の内容を簡条書きにまとめる際に、日本語学習者と日本語母語話者の間における言語処理の異同について考察する。簡条書きが原文を言い換えたものであるのか、または原文から抜き出されたものであるのかを、残存認定単位（ペケシュ 1989）により検討した。その結果を図 5-1、5-2 に示す。J 群では「抜き出し」が課題文 A では 1 割、課題文 B では 2 割に止まるのに対し、C 群では「抜き出し」の比率が高い。

次に、課題文 A、B それぞれで書き手が原文のどの箇所をどのように簡条書きにしているかを残存認定単位により分析した結果、割合が最も高かった箇所は、課題文 A では、C 群、J 群ともに、原文の「在宅時間が長くなり」(C 群・J 群 20 中 16 例)にあたる箇所であった。課題文 B では、C 群、J 群ともに、「保水材と一緒に入れて」(C 群 20 中 12 例、J 群 20 中 13 例)であった。言い換えられた表現を個々に見ると、C 群では動詞句のまま使用される傾向が読み取れるが、このことについては今後データ数を増やし、更なる分析と考察が必要である。

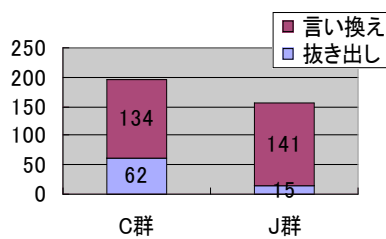


図 5-1 原文からの引用方法（課題文 A）

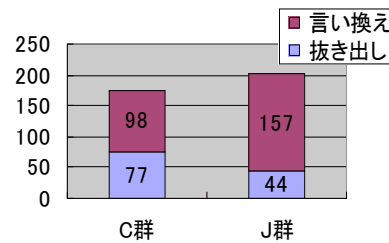


図 5-2 原文からの引用方法（課題文 B）

5. 結論

以上、発表ツールの利用を想定して学部学生により引用として書かれた簡条書きを、1) 用いられた表現形式、2) 原文から簡条書きへの言い換え、という側面から分析・考察を行った。その結果、中国語を母語とする学部留学生の簡条書きでは、日本人学生同様、句や文による表現を使用する割合が高い反面、「省略がある文」及び「記号との組み合わせ」による表現がほとんど使われていないことが明らかになった。さらに、原文から簡条書きにまとめる際には、日本人学部学生の多くが何らかの形で「言い換え」を行っているのに対し、中国語を母語とする学部留学生の場合は、半数近くが言い換えをせず、「抜き出し」を行っていることが判明した。これは、母語と第二言語での言語処理上の差の顕現と考えられ、「言い換え」の言語処理に内在するメカニズムを明らかにする必要がある。今後の課題として、このメカニズムの解明のために、中国語以外の母語話者を対象とした調査をすること、さらに語彙知識との関連を視野に入れた調査を加えることとする。

参考文献

- アンドレイ・ペケシュ「残存認定単位の規定と出現傾向」『文章構造と要約文の諸相』、くろしお出版、18-34、1989
- 鎌田美千子「学部留学生の発表活動に必要な学術的日本語文章表現—提示資料に見られる問題点とその指導—」『外国文学』54号、53-66、2005
- 環境省『環境白書（平成18年版）』ぎょうせい、2006
- 長沼行太郎・青嶋康文・入部明子・向後千春・幸田国広・佐野正俊・傍嶋恵子・豊澤弘信『日本語表現のレッスン』教育出版株式会社、2003
- 日本博物館協会ホームページ「やまびこネット」、
<http://www.j-muse.or.jp/joyful/science/sa015.html>